

---

# 遊戯王 ～世界又にかける転生者～

sy0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 ～世界又にかける転生者～

### 【Nコード】

N8024L

### 【作者名】

syo

### 【あらすじ】

主人公の神野妖斗は、友達とデュエルした帰り道に《ナチュル・ロック》にひかれて死んでしまった。

そこから第二の人生が始まり世界を転々としていく漂流物語！！

さらには他ではありえない精霊に憑かれてしまい、主人公疲労度増加中！

この小説は後半から書き方を変えたので、前半は駄文も駄文になっています。後半も駄文ですが、前半よりはましなはずなので、どうか最後までお付き合いください！

## プロローグ（前書き）

一度退会してしまったので、復旧させました。

## ブローグ

俺は神野 妖斗<sup>かんのようてい</sup>。自分で言うのもなんだけど、頭はかなりいいと思う。

運動神経は中の中くらい。ちょっと遊戯王好きなごくごく普通の中3だ。

しっかしなんでこんな説明をしているかって？

いま俺の周りは現実的に考えてありえない状況になっている。

「どうしてこうなった…」

俺はとりあえず「あの日」のことを振り返った。

あの日俺は普通に部活（野球）をやリ、友達と家に帰っていた。そのあと友達の上刃 弘樹<sup>かみとひろき</sup>のいえでいつものように友達4人でデュエルをした。そこまではよかったんだ。家に帰ろうと少し外れた裏道を通っていると、

急に前から超巨大な《ナチュル・ロック》が転がってきた！

「はっ！？この展開は……来オい！異世界トリップ！」

俺は一瞬で開き直リ、厨二の夢（異世界トリップ）になることを祈りながら、

抵抗せずにむしろそいつに向かって突っ込んでいった。

## プロローグ（後書き）

プロローグです。

デュエルは次々話くらいからかな。

## 第一話 転生？憑依？（前書き）

全部コピペ、前の作品が結構前になっていたの・・・

## 第一話 転生？憑依？

「……っ、ここは？」

何もないただ白い空間。これは本当に来たんじゃないのか？

「ももも、申し訳ございません！この度は私のペットがご迷惑をおかけして……」

キタ  
!!!!!!目の前には見た目12、3歳の少女。

あきらかに「神」だろ。

「そのとーり……いや、ちょっと違うかな。私は神見習いのセレナ。

てかホントすいません私のペットが……」

心読んでるし。てか本題は、

「転生させてくれるんだろうな？特権もあるよな？転生先決めていいよな？当然遊戯王な」

一気に聞きたいこといった。

「すごいですね、ほとんど私から言うこと無くなりましたよ。あ、1つだけ。転生か憑依かはすいませんがランダムです」

む……まあそんなくらいは許容範囲だな。

「では特権ですが、やっぱりチートドローですか？」

「そんななんいらん。とりあえずいま使ってる8つのデッキがあればいいよ。あとは主要メンバーに入れといてくれ。あ、初日に限って



転生先は3回までキャンセルできるってことで」

「謙虚ですね、まあいいでしょう。憑依した場合は憑依先のデッキも使えるので、あしからず」

「ではどこの世界へ？」

「やっぱセオリーどおりここは遊戯王gxだよな。」

「じゃあ遊戯王g「遊戯王ですね？わかりました。では・・・」おい？」

「へ？初っ端から波乱の予感？」

「GO！」

視界が光で埋め尽くされた。

## 第二話 チートの裏側（前書き）

この回デュエル？があります

## 第二話 チートの裏側

視界が戻った。そして冒頭。

ここは・・・電車の上？お、王様が対戦相手か。

てことは憑依だな俺のライフは・・・3700だ

王様のフィールドには・・・なんか蛾みたいなやつと《魔道戦士ブレイカー》ん？

いま俺のモンスター破壊されて・・・んん？

「まだまだ！《魔道戦士ブレイカー》でダイレクトアタック！」うおっ、

妖斗 Lp2200

「でもその蛾っぽいものの効果でおまえは負けだ！」

なんか勝手に言葉出てきた。しかもちよつとアレンジで。てかこの展開はあれしかないっしょ。

くらうただけくらっという転生先変えよう。

「何勘違いしてるんだ、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぞ

E  
」

くるよ

「速攻魔法！《狂戦士の魂》（バーサーカーソウル）！！！手札をすべて捨て、効果発動！モンスター以外のカードがでるまでデッキからカードをドローし、その枚数分追加攻撃できる！」

きましたよ遊戯王で1、2を争う有名シーン！

あ、いうまでもなく、ひょうい先は羽蛾ね？

「ドロー！引いたカードは《クイーンズ・ナイト》、追加攻撃！」

妖斗 Lp700

「二枚目！モンスターカード！追加攻撃！」

妖斗 Lp0

ぐっ！くるぞチート！

「三枚目！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー！

！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー！……

つ、も、モンスターカード！ドロー！「おい。」なんだ？

「いまの……っ、はなんだ？」

「な、ななんなんでもないわあ！ドロー！モンスターカード！「おいゴルア。」なんだよ？」

「やけにモンスターばっか引くと思ってたらそういう仕組みかあ！反吐が出るぜ！この虫野郎！！」

「はっ……く、くそっ！AIBO - ! AIBO - !」

充分弄ったし、満足満足。

おい、セレナー。

『なんでしょうか？』

転生先変更。

『了解しました。そんじゃ、come back!!!』  
再び視界が光で埋め尽くされた。

## 第二話 チートの裏側（後書き）

思い切って王様チート使ってみました設定。

すいませんが主人公のマイデッキ使うのはもうちょっと後になります。

### 第三話 有名シーンと条件追加（前書き）

この回2度目の転生。

### 第三話 有名シーンと条件追加

「では、2回目の転生ですがどちらへ？」

「あのさあ、人の話は最後まで聞こうな？」

「すいません、見習いで早とちりなもので・・・」

「10万歩譲って許してやろう。それじゃ、次こそ遊戯王GXの世界へ。」

時間は、ダ－「わかりました、遊戯王GXですね」クネスっておい  
「！！」

もういやこんな神様・・・

「ではレッツラGO！」

うわ、古っるー。

転生完了・・・だな？さーてどこにきたかわっかんねーな、あのアホ神のせいで。

「俺は・・・負けたくないイイ！！！！」

うわっ、びっくりした。相手ヘルカイザーになりたての亮さんか。てことは俺は・・・誰だったっけ？あの《酸のラスト・マシン・ウイルス》使ってるやつって。

ま、いーや名前忘れたし。

「《オーバーロード・フュージョン》発動！墓地の《サイバー・ドラゴン》を含む6体のモンスターを除外し、こい！《キメラテック・オーバー・ドラゴン》！！」

あ！確かこのデュエルってびりびり来るやつだったよな？

転生先変えないと死んじゃう！でも「五連打<sup>グォレンダア</sup>！！！！」聞きたい！

「なにをぶつぶついつているんだ！いけ！キメラテック！『エヴォリューション・レザルト・バースト』！！」

五オ連打ア（グォレンダア）！！！！」

きけた！我、満足せり！あ、光線思ってたよりはええ！セレナ、セレナー！

『まったく世話の焼ける人ですねー』  
イラッ。



「すみませんすみませんすみませんでしたあー！もうやめてええええ！……目、目があ！」

べつに変なことしてないよ？ちよつと半日玉ねぎ切らせてるだけだよ？

「もう怒った。もうひとつ条件追加だ。俺をオリキャラとして転生させる。」

・・・

「それはきついです！そんなことしたらわたしの信用問題です！……ごっつ。」

「はい、あと玉ねぎ1t 終わったら正座20時間」

「わかりました、わかったからやめてええええええ！！！」

「んじゃ、今すぐ元祖遊戯王のバトルシティあたりに転生させる。」

「は、ハイ……GO……」

視界がなんか最初るときよりどんよりとした光に包まれていった。

### 第三話 有名シーンと条件追加（後書き）

次回やつと主人公のマイデッキその1がでます。

感想があつたらお待ちしております。

#### 第四話 初めての相手 マイデッキ1（前書き）

やっときた主人公のマイデッキその1。  
何かは本編をどうぞ。

## 第四話 初めての相手 マイデッキ1

「散れ！」

えええええゝいきなりスタートかよ。

まあ、せっかく原作キャラと戦える機会だし、楽しむとしますか。

あ、王様とか社長は飛行船で戦いたいからまだ自重。

まあある程度の原作ブレイクしたいんだけどね。

「・・・と、デッキは・・・」

おし。8つある。俺は友達曰く『究極のあきつぼさ』を持っているらしく、まあ自分でも否定できないが・・・とにかく3回以上連続でおなじデッキを使いたくない。

だからデッキ数がほかのやつと比べてやたら多い。

シンクロもあるが、まだ自重。顔芸と戦うときとか命かかっていると きにつかおうかな。

「おい！僕とデュエルしろ！」

おっ、申し込み。おれの初相手は…？

・・・

ええええゝエスパー野郎？やってもいいけど勝ったら凡骨どうすんだ？ま、

「いいぜ。パズルカードは1枚だよな？」

「ああ。そしておれは『人造人間サイコ・ショッカー』をアンティとする」

そんなカード、おれは36枚持っているよ。

さすがにウソだが、6、7枚は持つてるぞ？

んじゃおれの初陣はこのデッキで。

「俺は《青眼の究極竜》だ」

「「「なにiiiiiiii!?!?!?!?!?!」」」  
ざわ・・・ざわ・・・

あーそーいや幻のレアカードだったつけ。

「んじゃ、始めようぜ」

「あ、ああ。アンティには驚いたが、それとデュエルは別だ。僕には超能力があるのでな」

「君の弟たちはそこにいるんだけど？」

「なにっ？なぜだ？屋上にいるといったはず・・・っていねえ！」

「ひっかかったひっかかった。で、その無線をきれ」

「貴様、なぜそれを!?!」

原作知識。これで手札見られる心配なし。

「とにかくやるぞ！」

「ちっ・・・」

「デュエル！！！！」

「先攻はもらう！ドロー！僕は《サイバー・レイダー》を召喚！さらに《二重召喚》発動！《サイバー・レイダー》を生け贄に、こい！《人造人間サイコ・ショッカー》！！」

おー早い。てか《二重召喚》ってあったっけ？まあいいか。てか手札やべえ。そろい過ぎ。

「僕はターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー！」

手札から《おろかな埋葬》発動！デッキから《青眼の白龍》を墓地へ送る。

さらに《手札断殺》発動。手札の《青眼の白龍》2枚を墓地に送り2枚ドロー」

「僕も2枚捨て2ドロー」

「ワンキル行くぞ！《龍の鏡》！墓地の《青眼の白龍》3体を除外し、現れる！《青眼の究極竜》！！」

さらに《異次元からの埋葬》！今除外した3体を墓地に戻し、もう一枚の《龍の鏡》！

こい、2体目の！《青眼の究極竜》！！」

「な・・・あ、ああ・・・」

エスパー戦意喪失。

「バトル！！《青眼の究極竜》で《人造人間サイコ・ショッカー》を攻撃！『アルティメット・バースト』！！」

「うつつ・・・」

エスパ― LP 1900

「終わりだ！2体目の《青眼の究極竜》でダイレクトアタック！  
アルティメット・バースト』！！」

「ぐあああつ！」

エスパ― LP 0

「粉碎！玉砕！！大喝采！！フハハハハ！ワーハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「くそっ！受け取れ！」

「パズルカードはもらうが、アンティカードはいらん」

「え？」

「俺持つてるから。そいつは大切なカードなんだろう？」

「あ、ああ・・・」

「だったらもつとけ。そいつともっと強くなれよ、な？」

「ありがとう、じゃあパズルカードだ」

「おし後4枚だ！」

そして俺は次の相手を探しに街中へと出て行った。



#### 第四話 初めての相手 マイデッキ1（後書き）

まずあらわれた1つ目のデッキ。

見ればわかると思いますが、【青眼の白龍】です。

少しネタバレすると、8つの内3つはドラゴンです。  
タイプは違いますが・・・

感想、ありましたらお待ちしてます！

## 第五話 初めての主要キャラ マイデッキ2（前書き）

今回初めて決勝進出者とデュエル。誰かは本編どうぞ！

## 第五話 初めての主要キャラ マイデッキ2

えーっと、おれの初デュエルから約2時間。

その間俺は大きい道しか通ってないし、実際デュエルディスク付けてる人もいるのに何故か話しかけれん。こっちから声をかけても

「すみません、今から他にデュエル相手いるんで・・・」  
とか言いながらせつまい喫茶店に入るやつもいれば、

「あ、そろそろ3時のおやつだ！」

といった猛ダッシュして逃げる奴もいる。その時11:30。

やっぱ初めに究極竜2連打ア！はまずかったか？

と若干後悔しつつ相手を探し歩いていたら

「アンタ、さつきノーダメワンキル決めた人ね？」

という声がしたため、

「そうだが？」

と言いながら振り向くと

・・・

「おわあっ!？」

そこにいたのは金髪で露出の激しい服を身にまとった明らかにアネキ肌な女性、御存知ハ・パイ使いの孔雀くじゃくまい舞が立っていた。まさか・

「アンタ、アタシとデュエルしなさい！」

オイオイマジかよ、いきなり決勝進出者とやんの？まだはええーつて。

「いや、いまh「パズルカードはお互い2枚、アタシのアンティは《ハーピー・レディ三姉妹》よ！」なっ……」

話聞こうぜ、どこぞの神様じゃあるまいし。とはいえ、なんかギヤラリーできてるし、ここはいつちよ派手に原作破壊しますか！え？エスパー？……さあ、今から「派手に」原作破壊しますか！

「いいぜ。俺のアンティは……」  
主要キャラに手は抜けん。

「《大天使クリスティア》だ」

「見たことないカードね、まあいいわ、始めましょ」  
「ああ、本気でいくぞ！」

「「デュエル!!」」

「アタシの先攻、ドロー！まずは様子見ね、《ハーピー・レディ1》を召喚！」

そして《デザートストーム》発動！《ハーピー・レディ1》の効果も合わさって、攻撃力は2100！

さらに《万華鏡・華麗なる分身》発動！きなさい、《ハーピー・レディ三姉妹》！

その攻撃力は《ハーピー・レディ1》と《デザートストーム》の効果で2750！カードを2枚セットし、  
ターンエンドよ！」

……えーと、まずどこが様子見？1ターン目から2100と27

50ねえ・・・

んで《ハッピー・レディ》ってこのころ1、2、3シリーズだった  
っけ？やっぱイレギュラー混ざると色々違ってくるのかなあ？

ま、2750なんて俺のデッキじゃ、

「俺のターン、ドロー！」

よくもなく、悪くもなく、だな。

「俺は《死皇帝の陵墓》と《神の居城・ヴァルハラ》発動。

まずヴァルハラの効果を発動し、《アテナ》を特殊召喚！さらに《  
死皇帝の陵墓》の効果で2000ライフポイントを払い、《大天使  
クリスティア》を召喚。

《アテナ》の効果発動、相手に600ダメージ！」

「くっ・・・」

妖斗LP 2000

舞LP 3400

「バトルフェイズ！《大天使クリスティア》で《ハッピー・レディ  
1》を攻撃！『クリスティー・フラッシュ』！」

おおっ厨二。

舞LP 2200

「さらに《アテナ》で攻撃力1950になった《ハッピー・レディ  
三姉妹》に攻撃！『ソーラー・ライト』！」

ネーミングセンスが・・・もうこれから知ってるやつ以外に名前付  
けんのやめよ・・・

「うつ・・・」

舞LP 2050

「ターンエンド」

「私のターン！《強欲な壺》！カードを2枚ドロ！さらに2枚目の《デザートストーム》！そして《ハーピー・クイーン》召喚！召喚時にリバースカードオープン！《連鎖破壊》！この効果でアタシはデッキから《ハーピー・レディ1》を2枚墓地へ送り、これで終わりよ！リバースカード

《ヒステリック・パーティー》！……は、発動しない！？どういう事！？

「《大天使クリスティア》はあらゆる特殊召喚を封じる永続効果を持っている！」

「そ…そんな…ターンエンド…」

ブラフも伏せずに舞はエンド宣言した。

「いいコンボだったぜ。クリスティアがいなけりゃ負けてたかもな。俺のターン、ドロ！」

バトル！《アテナ》でハーピー・クイーンに攻撃！」

攻撃名自粛。

舞LP 1850

「終わりだ！楽しかったぜ。《大天使クリスティア》でダイレクトアタック！」

「うわあああっ！」

舞LP 0

「受け取りな、パズルカードとアンティだ」

「例によってパズルはもらうがアンティはいらん」

「ありがとね……アタシの分までがんばりなさいよ！」

「ああ……まかせろ。かならず決勝に出てやる！」

さあ、あと2枚だ。がんばるぞー！

ん？そういやなんか……。ああ！！舞に勝ったってことは俺決  
勝でたら

初戦マリク！？ヤベえって、それはシャレになんねえよ……。あ  
いつもなかなかのチートドローとバランスプレイヤー持ってたよな  
確か……。先攻1ターン目攻撃とか……

それ以上に闇のゲーム怖いよ！！しまったあああああああああ  
！！！！！！！！

## 第五話 初めての主要キャラ マイデッキ2（後書き）

はい、そうです。某カードサイトでも有名な【終世】でございます。実はリアルに持つてるんですよ、終世。

でも費用がお年玉全部はたいてもまだ足りないという恐ろしいデッキなので、

作って後悔しました。めっちゃ強いですけど。

てかライフ4000制じゃきついんですけどね、陵墓使うには。

さあ、自分でバッドエンドへのレールひきました主人公。

次の相手はみんな知ってるあの人です。

感想、ありましたらお待ちしてます！



**第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラー！？（前書き）**

この回はデュエルはおまけ。  
それより次につなげる話です。

## 第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラー！？

「さあ・・・次の相手はだーれかな？」

そう言つて辺りを見回しても誰も相手にしてくれない。

「しょうがない・・・また原作キャラでも相手にするか・・・」

でも強烈な補正がかかっているのは確実だしな・・・舞倒したしどうせなら決勝出たいもんなあ・・・

そんなことを考えていると、後ろから

「ヒヨヒヨヒヨ・・・お前、僕とデュエルしろ！」

・・・

えええゝまじで城之内どうするんだろう？でもこいつはぶちのめしたい気も・・・

「よし、やろうぜ。パズルカードはいま何枚持つてるんだ？」

「4枚だ」

「よし、全賭け。」

「なんで！？お前も4枚じゃないか、8枚になつて2枚余るぞ？」

「そっちの方がスリル出るだろ？アンティみせな」

「まあ僕が君みたいなのにつに負けるわけないけどねゝヒヨヒヨヒヨヒヨ！！アンティは《インセクト女王》だ、きみは？」

・・・正直カチンときた。こいつはもう最大火力で焼き殺す。4000制のこの世界では使わないようにしようと思つたけどこいつに限つてその封印を解く！

「俺は《火炎地獄》だ・・・とつとと始めるぞ！」

「ひょ？僕に勝てるんでも？」

「「デュエル！！」」

「俺の先行ドロー！《デス・メテオ》発動！さらに《火炎地獄》2枚！」

「ピョー！！！」

妖斗LP 3000

羽蛾LP 1000

「さらにモンスターをセット！《太陽の書》！セットしたモンスターを表に！そのモンスターは《メタモルポット》！お互いに手札をすべて捨てて5枚ドロー！カードを3枚セットしターンエンド。」

「僕のターン！ドロー！カードを4枚伏せてターンエンド。」  
っ！？早！タイミング逃した……

「俺のターン！リバーオープン！《仕込みマシンガン》。1200ダメージ……させるか！トラップ発動《王宮のお触れ》！これできみのトラップは封じたピョー！！」ちっ」

「なら俺は《ファイヤー・トルーパー》召喚！効果発動。お前に1000ダメージ！！焼きつくせええええええええええ！！！！」

「うわあああああ！なぐんテネ。リバーカードオープン！《非常食》！僕の《王宮のお触れ》以外の2枚を墓地へ送り、2000ライフを回復！」

また防がれた……てかデッキおかしくね？昆虫はどこへいった昆虫は。

羽蛾LP 2000

「ち……俺は《ご隠居の猛毒薬》2枚で1600ダメージを与え、ターンエンド」

羽蛾LP 400

「僕のターン！ドロー。僕は《ゴキボール》を召喚、ダイレクトアタック！」

「うつ・・・てめえ・・・初めて戦闘ダメージを受けたのがお前だと...？ふざけるな・・・ふざけるなあああああっ!!」

妖斗LP 1500

「ターンエンドだピョー」

「俺のターン！ドロー！消し飛ばえっ！《ファイヤー・ソウル》！デッキの《ヴォルカニク・デビル》を除外して1500ダメージ！」

「うわあああああっ！」

羽蛾LP 0

「ほらよパズルカード。アンティは例によつて「いやもらっへ？」

「お前は個人的に腹立つから。例外」

「そ・・・そんな・・・あんまりだあっ！」

「だまれ。これはもらっていく。まあ使わないんだけどな」

「使わないのかよorz……」

よしパズルカード8枚！2枚余ったがまあいいだろう。さあ、スタジアムにいこう……。つと、その前に王様&社長とか王様vs洗脳城之内の戦いとか見ないとな。

適当に街でも回って時間つぶすか……。と思っていたが、ふいに後ろから

「神野……。妖斗……。っ！？誰だ？俺の名前知ってるだ？つかこの声……」

ゆっくり振り向くとそこには、

「弘樹！か！？」

俺の現実世界での親友……。上刃 弘樹<sup>かみひろき</sup>が、明らかにおかしい様子で立っていた。

「俺と……。デュエルだ……。闇のゲームでな！」

## 第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラー！？（後書き）

主人公が今回つけた「フルバーン」はマイデツキじゃないです。  
この世界にきて、4000だと楽に勝てるので封印しました。  
でも羽蛾がウザかったんで・・・

次話オリジナル展開になります。

ご感想、ありましたらお待ちしております

**第7話 友情を取り戻せ！ マイデツキ3（前書き）**

・・・すいませんこんな滞って。

ともかく今回オリキャラその2のデツキ判明！

てか両方相当ガチです。

## 第7話 友情を取り戻せ！ マイデツキ3

「おいおい・・・なんでおまえが・・・」

意味がわからない。俺は死んだからこの世界に転生したんだろ？ だったらなんでこいつが？

「そんなことはどうだっていい。俺はマリク様の命により危険分子の神野 妖斗を消しに来た。それだけだ」

っ・・・よく見たらこいつ額に眼が浮き出てやがる！ これは危ないな・・・

「いいだろう。だったらとっとデュエルやろっや」

聞きたいことはいっぱいある。こいつがこの世界にいる理由。危険分子とはなんのことか。だがまずは、おかしくなった俺の親友を助ける！

「お前の死に場所にふさわしい場所を用意した。ついてこい」

そう言っただけで弘樹は俺に背を向け『死に場所』に向かって歩いて行った。

「クククク・・・」

思いのほか役に立つようだあの少年は。我らグールズにとって計画に支障をきたしそうな者・・・危険分子は3人。まず、人形を倒しオシリスの所有者となった武藤遊戯。

我が姉、イシズからオベリスクを受け取ったこのバトルシティの主



催者、海馬瀬人。

そしてグルズの情報網でもまったく素性がつかめず、見たことのないカードを使って実力者を圧倒している神野 妖斗。遊戯に対してはいい駒を見つけたから送っておいた。

海馬と神野は神野 妖斗の親友を名乗り、見たこともないカードを使うあの少年に倒させるとしよう。

あの少年は水族館で梶木を倒して出てきたときに捕まえ、洗脳した。「あの少年の本当の力は知らんが、我らにとつていい方に働くだろう・・ククククク」

グルズのボス、マリクは人知れぬ邪悪な笑みを浮かべていた。

「ここは！」

「驚いたか？あいつらをよく見てみな！」

「なっ・・・！」

そこにいたのはぼろぼろの遊戯。海から這い上がってきた城之内。

二人ともずぶぬれである。

そう、この場所は童実野埠頭。あの遊戯と洗脳城之内がデュエルをした後だった。

あの一行は城之内と妹、静香の再会に喜んでいる。

遊戯がこつちに気づいたようだ。

「・・・っ、まさか君も親友を洗脳されたのか!？」

「ああ・・・おそらく今からデュエルするだろうな」

「マリクの野郎は俺がゆるさねえ！俺がやる！」

城之内がいきり立つがそれを妖斗が止めて

「悪い、あいつは俺が正気に戻す。君たちは観ていてくれ」

決意を秘めた妖斗の表情に二人はうなずき、一歩下がった。

妖斗はデッキを選ぶときに迷っていた。

（あいつは本気で戦うときはあのデッキを使う・・・それに対抗するには俺もあれを解禁するしかない・・・でもこの世界で使っているのか？・・・いや、使っしかない！俺は全力であいつと戦い、あいつを正気に戻す！）

「よし、待たせたな。デュエルを始めよう」

「あせんなよ、まずは下準備だ。」

「・・・！？」

二人の周りが闇に包まれ、頭上には暗雲が立ち込める。

気づいているのは2人と遊戯だけだ。

「このデュエルに鎖だの手錠だのはいらない・・・ライフが0になった瞬間・・・死ぬ！！」

そしてプレイヤーはライフダメージに応じた痛みを受けてもらおう！」

「闇のゲームか、城之内の時よりもたちが悪いな・・・俺が勝つてもあいつは死ぬ・・・どう戦えば？」

「妖斗、お前は全力で戦え！俺が千年パズルの力でなんとかして見せる！」

遊戯が声援してくれる。信じていいんだな？

「ありがとう。俺は俺の全力であいつを倒す！！！」

「減らず口をたたくな・・・本気でいくぞ！」

「デュエル！！！」

「先攻は俺だ・・・ドロー！俺は《インフェルニティ・ビートル》を攻撃表示で召喚！さらに《インフェルニティガン》を発動！効果で手札の《インフェルニティ・デーモン》を墓地へ送る！カードを

2枚伏せターンエンド！」

やっぱりか・・・弘樹の本気は【インフェルニティ】。恐ろしい爆発力を誇る強力デッキだ。

1ターン目からトリシューラ来なくてよかったぜ・・・こつちも相当な本気デッキだ！

「俺のターン、ドロー！《BF・蒼炎のシユラ》を召喚！さらにこのカードは自分フィールド上にBFが存在するとき、特殊召喚できる！こい、《BF・黒槍のブラスト》！さらに同じ特殊召喚条件をもつモンスター、《BF・疾風のゲイル》！さらにトラップカード《デルタ・クロウ・アンチ・リバース》 発動！

このトラップは自分フィールド上にBFが3体以上いるときに発動可能！相手のセットカードをすべて破壊する！」

手札がかなりいい。このまま押し切れるか・・・？

「フン、リバースカードオープン！《和睦の使者》、チェーンして《インフェルニティ・インフェルノ》！この効果で手札を1枚捨ててデッキから《インフェルニティ・ネクロマンサー》を墓地へ送る。さらに《和睦の使者》の効果で戦闘ダメージは0、さらに戦闘では破壊されない」

両方フリーチェーンかよ・・・やられたなあ・・・

「ちっ、カードを1枚伏せターンエンド」

「俺のターン！ドロー！ククク・・・俺は《インフェルニティ・ミラージュ》召喚！さらにビートルの効果、このカードをリリースし《インフェルニティ・ビートル》を2体特殊召喚！」

「・・・なあ遊戯、恐ろしくレベルの高いデュエルってのはわかるんだけどよ・・・」

「ああ、あの《インフェルニティ・ビートル》や《BF・疾風のゲイル》のテキストにある、『チューナー』の文字、あれが何を表わしているんだろう・・・」

「まあ、観てればわかるよな、いまはとりあえず妖斗に勝ってもらわないとな！ところで妖斗が勝ったらちゃんと洗脳を解くことなんかできるのか？」

「ああ、闇のゲームはその独特の雰囲気によってプレイヤーの心を恐怖によって支配している。

妖斗が勝ち、向こうの洗脳が解けるその一瞬に千年パズルの力を使えば・・・」

「俺には観てることしかできねえ・・・頼むぞ遊戯！」

「ああ、まかせてくれ城之内くん」

「《インフェルニティガン》の効果発動！墓地の《インフェルニティ・ネクロマンサー》と《インフェルニティ・デーモン》を「ちょっととまったあ！」なに！？」

「手札の《D・Dクロウ》の効果発動！お前の墓地の《インフェルニティ・デーモン》をゲームから除外！」

これでコンボはある程度止まる！

「ふん、《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果で《インフェルニティ・ビートル》を特殊召喚。いくぞ、レベル3、《インフェルニティ・ネクロマンサー》にレベル2、《インフェルニティ・ビートル》をチューニング！」

「「チューニング？　いったい何が起こるんだ！」」

「シンクロ召喚！こい、《A・O・Jカタストル》！」  
「使いやがった・・・シンクロ召喚、この世界で・・・」

「まだまだあ！レベル5、《A・O・Jカタストル》とレベル1《インフェルニティ・ミラージュ》にレベル2、《インフェルニティ・ビートル》をチューニング！死者と生者、零<sup>ゼロ</sup>にて交わりし時、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！出でよ、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》！」

「???ミラージュの効果は使わない!？」

「どうせ《禁じられた聖杯》かなんかだろうが。どうせならこっちの方が無効にされても攻撃力が高いしなあ！ヒヤハハハハハハ！」  
「でた。こいつは、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》が出ると某満足さん並みにテンションが上がる。っていうかほんとにリバーズ読まれたよ・・・どうすっかな？」

「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果発動！お前の《BF・疾風のゲイル》を破壊し・・・速効魔法！《禁じられた聖杯》！効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップさせる！」  
「ふん・・・」

「バトルフェイズ！《インフェルニティ・デス・ドラゴン》で《BF・疾風のゲイル》に攻撃！『デス・ファイア・ブラスト』！！！」  
「きた！」

「トラップ発動！《緊急同調》！俺はレベル4、《BF・黒槍のブラスト》にレベル3、《BF・疾風のゲイル》をチューニング！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！《BF・アイマード・ウィング》！」

「妖斗もシンクロ召喚を・・・あの二人は一体何者なのだ！？モクバ！あの二人の正体はわからんのか！」

「ごめん兄サマ、あいつらは日本どころかどこの情報にも引つかからないんだ・・・もう異世界人というしか・・・」

「異世界だとお！？そんな非科学的なものなど存在するわけがない！くそつ、あいつらは何者なのだ・・・」

ヘリの中では海馬兄弟が妖斗と弘樹の素性を探っていたが見当がつかない。

（ほんととは当たっている）

「ちつ、たしかそいつは戦闘破壊出来なかったな、ならば！《インフェルニティ・デス・ドラゴン》で

《BF - 蒼炎のシュラ》を攻撃！『デス・ファイア・ブラスト』！」

「うぐおおおっ！！がつ・・・！！」

《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の吐いたプレスがシュラを焼き尽くし、そのまま妖斗の体に当たった。

（こりゃガチでやべえ・・・早く決めないと！）

妖斗LP 2400

「おれを・・・満足させてくれよ！！！！」

## 第7話 友情を取り戻せ！ マイデツキ3（後書き）

状況説明

妖斗 手札0

場 《BF・アーマード・ウィング》  
伏せ0

弘樹

場《インフェルニティ・デス・ドラゴン》、《インフェルニティ・ビートル》  
伏せ0

・・・すいませんこんなガチで。  
どこの大会だ！って思います、自分でも。

あ、第6話のデュエルが色々根本的に間違っていたので、時間が空き次第修正します。

## 1章最終話 決着 新たな旅立ち（前書き）

かつてに1章とか作っちゃってすいません  
この回はいろんな意味でターニングポイントです！



## 1章最終話 決着 新たな旅立ち

「俺はターンエンドだ」

「俺は必ずお前を助ける！ドロー！！」

動作の一つ一つに体が悲鳴を上げる。だが・・・

「俺は《闇の誘惑》発動！

2枚ドローし、手札の《BF・銀盾のミストラル》を除外！そして  
《天よりの宝札》！

お互いの手札は0、よってお互いに6枚ドロー！」

「ここまでの手札増強を・・・」

やっぱチートだな、アニメ版の《天よりの宝札》。

この世界に来てカードショップに売ってたんで買っちゃったよ。

んで、『両方の』手札を増やすこのカードはなかなかの満足メタ。

「・・・よし！俺は《黒い旋風》発動！そして《BF・蒼炎のシユ  
ラ》召喚！黒い旋風の効果で《BF・そよ風のブリーズ》を手札に  
加え、自身の効果で特殊召喚！んで、《死者転生》！手札を1枚捨  
てて、墓地の《BF・黒槍のブラスト》を手札に！そして今捨てた  
《レベル・ステイラー》の効果で、《BF・アーマードウィング  
》のレベルを1上げて特殊召喚！」

「すごい・・・手札に全く無駄なカードがない。

すべてのカードが妖斗と『シンクロ』している！」

「ああ、そのまま押し切っちゃまえ！妖斗！！」

（しかし、なんだ向こうの笑みは？圧倒的に妖斗が有利なはず、なぜあんな余裕にしていられる？）

遊戯は1人だけ、弘樹の邪悪な笑みに言い知れぬ不安を覚えていた。

「いくぞ！レベル4、《BF - 蒼炎のシュラ》とレベル1、《レベル・ステイラー》にレベル3、《BF - そよ風のブリーズ》をチェーンング！吹き荒べ嵐よ！鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！シンクロ召喚！《BF - 孤高のシルバー・ウィンド》！」

妖斗の場にあたたなシンクロモンスターが現れた。

「《BF - 孤高のシルバー・ウィンド》の効果発動！『パーフェクト・ストーム』！」

弘樹の場の《インフェルニティ・デス・ドラゴン》が破壊された。

「シルバーウィンドはこのカードの攻撃力、2800以下の守備力を持つモンスターを2体まで破壊する！まあこのターンはバトルフェイズを行えないけどな。

俺はカードを1枚セットし、ターンエンド」

「・・・がっかりだぞ妖斗。お前がその程度とはな」

「何！？どういうことだ！」

「もういい、見ていればわかる。ドロー」

こいつは何を言っているんだ。インフェルニティは手札0じゃないと動かない。

しかもあいつの手札は7枚。何をするつもりだ？

「・・・《大嵐》」

くう！《天罰》が！

「さらに《インフェルニティガン》。効果で手札の《インフェルニティ・ビースト》を墓地へ。」

弘樹 手札4

「まだだ。《鳳凰神の羽根》 発動。手札を1枚捨て、墓地の《インフェルニティガン》を  
デッキトップへ」

おい・・・ウソだろ？まさか手札7枚から・・・

弘樹 手札2

「《D・D・R》。手札を1枚捨てて、除外されている《インフェルニティ・デーモン》を特殊召喚」

まずい・・・本当にまずい！

「デーモンの効果で《インフェルニティガン》を手札に加え、発動。ガンの効果で

《インフェルニティ・ネクロマンサー》、《インフェルニティ・ビートル》を特殊召喚。

レベル4、《インフェルニティ・デーモン》、レベル3、《インフェルニティ・ネクロマンサー》に

レベル2、《インフェルニティ・ビートル》をチューニング。

氷結界に眠りし三つ又の槍よ、今君臨しすべてを喰らえ。シンクロ召喚。

《氷結界の龍 トリシューラ》！！！！！！」

首が3つにわかれた氷の龍が現れた。

「効果発動。フィールド、手札、墓地からそれぞれ1枚ずつカードを除外！

フィールドのシルバーウィンド、墓地のゲイル、手札を1枚除外！」  
「くっそ・・・」

「まだだ。さらにガンの効果を発動、ネクロマンサーとビートルを特殊召喚。

ネクロマンサーの効果でデーモンを特殊召喚、効果発動。ガンをサーチする。そして三体をチューニング！再び現れよ、《氷結界の龍トリシューラ》！効果でアーマード・ウィング、墓地のシューラを除外。

お前の手札は0だ」

「そんな……」

救えない……フィールドは空、手札もなく、対抗手段はない。

俺は……俺は何もできずに……

「3体目のトリシューラをシンクロ召喚。お前の墓地のブリーズを除外、

そんなものか……お前はこんな程度だったのか。

トリシューラ3体でダイレクトアタック。『フリージング・トリプル・ブリザード』！！！！」

妖斗LP 0

負けた。

救えなかった……親友を。

遊戯、城之内の期待にこたえられなかった。

「すまない……遊g……城n……」

意識が遠のいていく。さあ、敗者には『死』という罰ゲームが残っているのみ。

終わったんだ……

「俺……絶……死……せは……ない……!!」

「妖斗！」

遊戯と……弘樹!?

デュエルが終わったら戻るようになってたのか?

だったらよかった……俺は1回死んでいる、もう何も望まない  
だんだん意識が遠のいていつて……俺は……

「俺が絶対に死なせはしない!」

千年パズルよ! たのむ! 闇の力を振り払い、妖斗を助けてくれ!  
千年パズルから光が飛び出し、消えかかっていく妖斗の体に直撃する。

その光が収まった時、そこに妖斗は……いなかった。そこには泣き叫ぶ哀れな少年、  
弘樹がいるだけ。

「お前……お前のせいで……妖斗が……てめえええ!!」  
「うっ……妖斗……俺のせいで……」

弘樹は完全に放心状態で聞こえているのかもわからない。

「やめるんだ城之内君！この子も君と同じでマリクに操られていた・  
・

君ならわかるだろう！」

遊戯が止めに入る。

「っ・・・すまねえ・・・くそおおおおっ！！！！！！」

城之内の叫び声が埠頭に空しく響いていた・・・・・

「スカイスクレイパー・シュート！！！！！！！」

ものすごい歓声が聞こえ、俺は目を覚ました。

なに！？俺は確か弘樹に負けて・・・

死んだはずだ。なのに耳がキーンとする感覚もある、ちゃんと椅子に座っている。

ここは一体・・・？

どこかの会場???

ますますわけがわからない。どうなっている？

っーかあその少年・・・

その時ある考えが頭の中をよぎった。これは・・・

『妖斗・・・妖斗・・・聞こえていますか?』

「お前はエレナ!?おい説明しろ、どうなってんだこの状況は?」

『あなたが負け、消える瞬間、遊戯さんが千年パズルの力を使って闇を振り払おうとしたのです。しかし、完全には闇を消せずに中途半端になってしまいました』

「そんでまさか・・・」

『ええ、これは・・・』

その時、先ほどの少年が人差し指と中指を突き出し、こう叫んだ。

「ガッチャ!!!楽しいデュエルだったぜ!!!」

『「遊戯王GXの世界に!!」』

ピンポンパンポン

『試験番号111番 神野 妖斗 試験会場に來なさい』

そう、ここからおれの新たな人生が始まって行く……



## 1章最終話 決着 新たな旅立ち（後書き）

そう、GXに転生してしまった主人公。

ここからしばらく無印組はお休み。

新たな妖斗の戦いをご覧ください！

原作沿い……。なはず。いろんな意味で違うけど。

## 番外 主人公設定（前書き）

まあオリキャラの設定です。  
対話形式って難しい・・・

## 番外 主人公設定

主人公：神野 妖斗

デュエル大好きな典型的なトリッパ。

8つのデッキを持ち、その構築能力もなかなかのもの。

一応ドラゴン好き。

厨二の精神を持っており、ウザいやつにはルール無用で容赦なく叩き潰す。

でも基本はノリのいい好青年。ボケと突っ込み両対応。

マリクに乗っ取られた親友の弘樹（後述）に闇のデュエルで負け、死にかけてたが遊戯の千年パズルの力によりGXの世界へ飛ばされる。容姿はデスノのライトを黒髪にして少し短くした感じ。

### デッキ集

1：【青眼の白龍】とにかく押せ押せな超パワーデッキ。

2：【終世】《大天使クリスティア》と《光と闇の竜》で相手を制圧し、ヴァルハラや陵墓で上級を出していくハイビート。

3：【BF】展開力を利用したデッキ。ほんととは切り札としてアスラピスクが眠っている。  
他はまた本編で。

「おい」

どうしました？主人公の妖斗君。

「原作でシンクロ使っちゃったんだが大丈夫なのか？」

問題なし。作者パワー。それが小説のいいところつまりは・・・

「ご都合主義ですねわかります」

だったらいいじゃんか。

「あとさ、こんなテーマデッキばつかでこの先勝てんのか？」

何いつてんすか。BFがあるじゃないっすか。

「もしかして俺ガチそんだけ！？」

やかましい。てかBFもテーマでしょう。この小説作るときに一瞬うかんだ草案見せてやるよ。

1 BF

2 インフェルニティ

3 次元帝

4 スキドレバルバ

5 剣闘獣（ベストロ3）

6 ライトロード（ルミナス3）

7 アンデシンクロ（ゾンキヤリ馬頭鬼3）

8 弾圧除去ガジェ

「……すいません聞かない方がよかったです」

だろうなあ。さすがに自重したんだ。自重しすぎたけど……

「で、ガチが1つになったわけか」

うん、もう1つくらいは出してもいいかな。さすがにづらいしね。

「そつだそつだ、この先出てくるであろう初手サイドラ3枚男やピンチ時バブルマンドロー率8割を誇る男にBFだけじゃ勝てんだろうが」

なんで？引きいいじゃないっすか。

「それを超えるのがかの有名な主人公補正だろうが」

そんだけか？早く他のやつを紹介しないと。

「うつぜえ・・・2人しかいないけどな」

やかましい。とりあえずオリジナル要素は少なくしときたいんだ。

「・・・はあ。そんじゃ次、あのアホ神だ」

（実はシンクロ使ったことで大きな変化が・・・まあいいか、後々気づくだろ）

セレナ      自称神見習い    アホ

妖斗を殺した張本人。ペットに《ナチュル・ロック》を飼っている。デュエルはしない様子。神だから出来ないこともないと思うが・・・見習いとはいったものの、人に比べればとんでもない力がある。

一応時間転移と空間転移が得意分野である。しかしおっちょこちょいというかドジというか、人の話を全く聞かないので、聞かせるし

かない。

とにかく早とちりにしてドジ。

まだわからないがカードの精霊のようである。

容姿はファンタシースターポータブル2のエミリアをロングにしてちっちゃくした感じ。

「なんですかこの私アンチな紹介は？アホ？そんな発言した覚えがありませんよ！」

「気にするな、それに・・・」

うんそうそう、気にしちゃダメ。それに・・・

「2人とも、慰めてくれるんですか！」

「「ここに書いてあることはすべて真実だから弁解のしようがない」」

orz 離脱。

さあ、セリフ2言のアホ神はほつといてだな・・・

「おう！次いこ、次！」

「ひどいですよ！精霊かもしれないという大ニュースがあったじゃないですか！！」 復活。

そうだったっけ？オリカだったような気がするが・・・

神だから《オベリスク》とかでいいだろ。

「なんで私があんな筋骨隆々のやつに「ワイトにするよ?」まだかわいげがある分ましじゃないですか!」

さて冗談はここまでにしよう。GXからはセレナが精霊として妖斗につくらしいからよろしく「チェンジで」

「ガンン……わかりましたようもうあなたの存在やら世界やら全て消し飛ばしてあげますよふフフフフフフ……」

カアアアアア……

ちょ、妖斗!やばいつてあのアホは一応神だっつーの!死ぬうううううう!!

「あーわかったわかった!!これからよろしくおねがいますうううう!!」

シューウウウウウ……

「ヤンデレ設定あったんだなこいつ……気をつけよう」

つーかほら!いつまでもこんなくだらんことしてないでさっさと最後の紹介はいるぞ!

「くだらんっておまえな……世界の命運かかってたぞ今のやり取りで」

知らん知らん、さあ、お次は!?!?この方です!

「どこの歌番だ……」

上刃 弘樹

前の世界での妖斗の親友。

遊戯王の世界にいつの間にか存在していたトリッパ。

なぜ遊戯王の世界に来たかはまだ不明。

愛用デッキは【インフェルニティ】。

他にも2、3個デッキを所持している。

妖斗もこの世界にいると思い妖斗の名前を呼びながら探していたところをグールズにつかまり、

マリクに洗脳されてしまった。

そして正気に戻ることなく妖斗を倒し、やっと洗脳から解放された。しかしこの後の出番はおそらくずっと後だと思われる。

容姿はまんまガツシユの清麿。

「……へ？俺出番ないの？？」

悪いね〜GXに飛んじやったもんだから、無印のキャラにかまってる暇がないのさ。

「俺今なかなか活躍中じゃね！？妖斗がいなくなってから……とか作ればよくね？」

大丈夫大丈夫。君のその後は妖斗のほうでわかるはずだよ。



「新キャラなのに・・・新キャラなのに扱い悲惨・・・」

どんマイどんマイ！明日がある！

「そのどんマイのカタカナ具合がさらにうぜエ！」

やかましいーそんじゃ、この駄文に付き合ってくれという方は、  
またの更新を待っていてください！

「終わらせ方が強引すぎる！まだいろいろあるだろうが！！」

だつてさー？空気になった主人公と神様がすねてるんですもの。

「はあ・・・そんじゃ、これからもよろしくな」

ハイテンションプリーズ！

「「「よろしくお願いします！！！！」」」

## 番外 主人公設定（後書き）

すいません・・・書けば書くほどグダグダに・・・  
次回は本編に入ります！

第2期1話 vs クロノス マイデッキ4（前書き）

やっと始まりました、第二期。

主人公のデッキが明らかに積み込みですが、仕様という事で。

## 第2期1話 vs クロノス マイデツキ4

まじか・・・GXに転生するとは・・・

「なにをボケつとしているノーネ？早く始めるノーネ」  
相手クロノスだし。

「わかりましたよ、始めましょう」

「デュエル！！」

「先攻は私なノーネ、ドロ〜によ！まずは手札から《パワー・ボンド》発動！手札の《古代の機械巨人》と《古代の機械巨竜》2体を融合！現れるノーネ！《古代の機械究極巨人》！《パワー・ボンド》の効果により攻撃力2倍の8800！さらに《サイバー・ジラフ》召喚！効果発動、リリースしてこのターンの効果ダメージを無効にするノーネ」

・・・\（。ロ\）（ノロ。）ノ・・・

突っ込みどころ多すぎないか？カイザーのカードまで！？

「ターンエンドなノーネ」

「...俺のターン、ドロー。」

もう俺は、自重なんてしない！

「手札から《ドラグニティ・ファランクス》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！

《クイック・シンクロン》を生け贄にして、《ドラグニティ・プリムス・ピルス》を召喚、効果発動！」

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついた

鳥獣族モンスター1体を選択して発動する事ができる。

自分のデッキからレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を装備魔法カード扱いとして、選択したモンスターに装備する。

「俺は《ドラグニティ・パルチザン》を装備する！さらに魔法カード《二重召喚》でモンスターをセット！《太陽の書》発動！セットモンスターは《メタモルポット》！手札はゼロ、よって5枚ドロ―！」

「私も5枚ドロ―なノーネ・・・グヌヌウウ、シンクロ使いとは癪な奴ナノーネ」

「は？いま何と？」

「だーから、シンクロを使うなんて新入生にしては癪に障るといったノーネ！」

「なんで先生がシンクロ召喚を知っているんですか！？それにまだシンクロ召喚もしてないのに！」

「なんでって、シンクロ召喚はつい最近、あの伝説のデュエリスト、海馬瀬戸と上刃弘樹が共同制作した画期的なシステムなノーネ、そりゃみんな知っているノーネ」

なんてこつたい、弘樹のやつ、あの後何したんだ？

「つかぬことをお伺いしますが、第一回バトルシティで優勝したのは誰ですか？」

「常識の常識なノーネ、伝説のデュエリスト、武藤遊戯と上刃弘樹が劇的な引き分けて同時優勝したノーネ」

うわゝ・・・あいつそんなとこまで行つてたのか、だからシンクロ召喚も世間的に知られてしまったわけか。

「おしゃべりが過ぎるノーネ。早くターンを進めるノーネ」

「あ、すいません。だったら遠慮はいりませんね、まだまだいきます！」

とはいってもワンキルは無理そうだな。

「《シンクロ・ヒーロー》を《メタモルポット》に装備、効果でレベル3になった《メタモルポット》に《ドラグニティ・パルチザン》の効果でチューナーとなったレベル5の《ドラグニティ・プリムス・ピルス》をチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！カードを2枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、私は《古代の機械究極巨人》で、《スターダスト・ドラゴン》に攻撃！「手札から《クリボー》を捨て、戦闘ダメージをゼロにする！」ちっ、カードを4枚伏せてターンエンドなノーネ」

4枚も伏せやがった・・・攻撃反応かそれともブラフか？まあ何だろうと関係なし！！

「このターンで終わしましょう、俺のターン、ドロ―！《強欲な壺》発動、2枚ドロ―！セットカード、《地砕き》！《古代の機械究

「極巨人》を破壊！」

「しかし、究極巨人の効果で《古代の機械巨人》を特殊召喚するノーネ」

「これがねらいですよ、《ドラグニティ・ドウクス》召喚！効果で《ドラグニティ・ファランクス》を装備し、ファランクスの効果で自身を特殊召喚！レベル4の《ドラグニティ・ドウクス》にレベル2の《ドラグニティ・ファランクス》をチューニング！

伝説の竜騎士、その槍をもち全てを貫け！シンクロ召喚！《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》！効果で墓地の《ドラグニティ・パルチザン》を装備、チューナーとなる！

さらにまたまた《二重召喚》、《ファントム・オブ・カオス》を召喚！効果で《スターダスト・ドラゴン》を除外し、コピー！」

「な、なにをする気ナノーネ？」

「今見せてあげますよ、このカードはシンクロモンスターのチューナーと《スターダスト・ドラゴン》でシンクロ召喚する！レベル4、《スターダスト・ドラゴン》にレベル6、《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》をチューニング！集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！アクセルシンクロオオ！！生来せよ！！《シューティング・スター・ドラゴン》！！！」

「な、何、なノーネこのモンスターは！？」

「おおお！すつげえ！見たことないモンスターだぜ！」

「あんなモンスター召喚できるあの人のタクティクスもすごいっす！！」

「綺麗……」

「あい「あいつはなかなか興味深い新入生だな」……」

わめいてるわめいてるギャラリーも。俺が深く付き合うのは十代、翔、明日香、サンダーになってからの万丈目、カイザーくらいかな。……ん？俺はあえて言わないよ、やつは自然にそばにいる。そう、たとえるなら『空気』のように……

「《シューティング・スター・ドラゴン》の効果発動！自分のデッキの上からカードを5枚めくり、このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる！」

「ふん、ならば《サンダー・ブレイク》発動！手札を1枚捨てて、《シューティング・スター・ドラゴン》を「悪いな、シューティングスターの2つ目の効果！フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる！」又ウ、だったら《非常食》！3枚のカードを墓地に送って3000回復ナローネ！これでライフは7000、4回攻撃しないとこのターンで私を倒すのは不可能なノーネ！5枚中4枚チューナーは相当低い確率なノーネ！」

「確かに、だが俺は奇跡を起こす！1枚目！チューナーモンスター、《ドラグニティ・コルセスカ》！2枚目！《デブリ・ドラゴン》！3枚目エ！《ジャンク・シンクロン》！4枚目！！《ドラグニティ・アキュリス》！！そしてラスト5枚目！！チューナーモンスター、《グローアップ・バルブ》！！！！」

「そ……そんな……5枚ともチューナーデスーノ！？」



「行くぞ、《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃……！」  
スターダスト・ミラージュ」……5オ連打ア……！」  
グオレンダア

「ペーペロンチノ……！！！」

クロノスLP 0

あ……危なかった……まさか先攻1ターンで8800の貫通持ちが出るとは。

「……か原作とずれすぎだろ、時空が歪んでる的なテンプレか？」

「文句ないノーネ、7000ものライフを1ターンで0にするとは、文句無しでライイエローに配属スル……」

「……まただ、なんか違和感あるな。初期のクロノスってこんなやさしかったか？」

(あの……)

おお、空気と化していた神様じゃないか。どうした？

(この世界は遊戯王GXであって、GXではありません……)

????どういうことだ？

(一種の並行世界とでも思ってもらいたらいいのでしょうか？基本的な設定そのものは変わってませんが、キャラの設定や時間の流れが色々変わっています。あのクロノスは改心した後です)

ほう、だから新人生にもあんなやさしいのか、キャラ設定かわつてるとちよつとめんどそうだな。

「……と言いたところデスーが、筆記の時にユーは名前を書いてないノーネ、点数自体は満点なのーに、もったいないことをしたノーネ」

……なにやってんだ俺。

「よつて、オシリスレッドに配属するノーネ」

マジかよおおおお……



## 第2期1話 vs クロノス マイデッキ4（後書き）

デッキとしては、【シューティングスターを出したいドラグニティ】  
とでもいつときましようか・・・

パルチザンでドラグニティナイトをチューナーにして、ファンカス  
でスターダストコピってシューティングスター出しましょうと。  
ほとんど出ませんが。

次回予告 この時間軸のズレが原因で、入学式からとんでもないこ  
とが・・・

## 第二期2話 まさかの開催！マイデツキ5（前書き）

原作崩壊も甚だしいので、ご注意ください。

つじつま合わせに強引な設定持ち込むこともある・・・かも？

## 第二期2話 まさかの開催！マイデツキ5

・・・・というわけで、はれて入学して入学式まで各自寮で待機・  
・  
なんだがなんだここは。元いた世界にあった住宅街の裏路地にある  
ぼろアパート・・・  
まではいかないにしてもぼろいな・・・まあ、俺は何故か1人部屋  
だから良いほうか。  
よく十代たちはこんなところで3人部屋でいけるよな。ってか俺まだ  
十代みてないんだが・・・どこn「おい！お前、俺の1こあと  
のスゲーモンスター召喚したやつだよな！俺とデュエルしようぜ！」  
いたいた。こいつはキャラ設定変わってないみたいだな。二十代じ  
やなくて一安心だぜ。

「いや、後にしよう。入学式始まっちまうぞ。」  
いまはまだやりたくないし。

「なんでだよーまだ全然時間あるじゃんかー！」  
めんどくせーな、ここは口車に乗せとくか・・・

「俺が見た限り、お前はトップクラスに強いデュエリストだ。俺も  
腕にはそれなりの自信がある。俺らがいまデュエルしたら相当な熱  
戦になって時間がかかるだろ？」

「お、おう！そうだな！又後にしよう！『強いデュエリスト同士』  
な！」

・・・・すっげえ笑顔。そんなうれしかったのか。

「おう、んじゃまた後でな！」

よし、くつろごう。

ピンポンパーンポン

『ただいまより15分後、入学式を行います。各生徒、教職員は会場までお越しください』

「お、そろそろか」

っていうか入学式なんてイベントあったっけ？いまさらだが。

（ないですよ、それに変な予感がしますから一応デッキを持って行つとした方がいいですよ？）

お、そうか。てかなんでそんな出番少ないんだ？

（向こうの神界がいまごたついてるんですよ、今しばらく出てこれないので、あなたのデッキにあった精霊派遣しといたんで来ると思いますよ）

俺のデッキ？あと4つの中のどれかってことか？

（はい、もうすこししたら来ると思うんで、仲よくしてやってください！それでは）

……言うだけ言って消えやがった。

しかし、精霊って誰だ？気になるな。

「つっと、いそがねーと！遅れちまうぜ！」

そういつて俺はとびだしていった。

まさかあんな特大『イベント』が起こるとは思わずに・・・

・・・

一つ言えることは、眠い。

・・・



「……それでは、これからも勉強にデュエルに励んでください」

お……終わった……死ぬかと思った……

「次に、生徒全員に連絡です」  
「ん？こんなことあったっけ？」

「知ってる人、そうでない人いると思いますが、今日よりいきなり、この島でプロアマ学生問わず戦う大会が開催されます！」

「……は？それって第二期の『その名も！『ジエネックス』！！』」

「ワーワー！！！！！！！！！！」

「う、ウソだろ？このタイミングでジエネックス！？万丈目もまだサンダーになってないのに！？」

「優勝はこの万丈目サンダーがいただいた！」  
「『『『『『サンダー！！！！！！！！！！』』』』」

「なってた。」

「じ、じゃあ10JOINことフブキングだってまだ……」

「優勝はこの僕！天~~~~~~~~~??.?」

「『『『『『ジョイン！！！！！！！！！！』』』』」

きゃー！！！！きゃー！！！！

・・・いた。

そうだ！イヤッホオオオオオオオオオオは！？

「えゝジェネックス開会式において、スペシャルゲストをお呼びしました！」

ワー！！ワー！！

もうわかった。オチが。

「その名も、プロデュエリスト！エド・フェニックスウウウウ！！！！！！」

「イイイイイイイイイヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

校長が宣言した瞬間ドームの天井突き破って奇声を発したエドがパラシュートで降りてきた・・・

生で聴けるとは・・・つーか天井・・・

「みんなヨロシク。エド・フェニックスだ」

ウオオオオオオオ！！！！

くそっ・・・どうせここにいないその他諸々もどっかでいるんだろ  
うな。

・・・「えゝそれではルール説明を」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ルールは適当に聞き流す。どうせ勝てばいいんだろ？

「ではこれにて、入学式兼ジェネックス開会式を終了します！開始時間は2時間後！  
各々デッキ調整などを欠かさないように！」

そんな馬鹿な・・・これは原作のズレとか言ってる場合じゃねえぞ。  
崩壊してんじゃねえか。

幸いデッキの数には触れられなかったな。  
俺のデッキはあと4つ・・・なんだが・・・え！？  
無印の世界で使ったデッキが無くなってる！どういうことだ！！？？

・・・そのあと探してみたがどこにもなかった。  
「くそ、この残った4つでやるしかない・・・が、ラスト1つはあまり使いたくないな。だがとりあえずデッキの調整しとこうか・・・」

2時間後・・・・・・・・

『デュエル・・・開始イ!!!!!!!!!!』

「な!?!このフレーズは!!!!!!某海馬の側近が来てるというのか!」

そつやって放送に突っ込みながら俺のジエネックスが始まった。

「おい妖斗!デュエルしよ!デビルバット〇ーストオオ!!!!!!!!!!」  
「おおおおおい!!」

開始5秒で敗北フラグ立てられてたまるかあ!十代め!

・・・・・・・・

「おい、デュエルしろよ」

「キングのデュエルは常にエンターテイメントでなければならない  
!?!?!」

変な声が聞こえるけどムシムシ。

「まさにDEATH GAME!!!!」

「俺は・・・負けたくないいいいいっ!!!!!!」

へんな声が聞こえ（ry

・・・・・・・・・・・・・・・・

「きみ、僕とデュエルしないか？」

・・・エドですか。これは十代再起不能フラグぶち折れとのお告げか？

そういえばこいつはTFでカモにしてたなあ、いっちょ逃げないでやりますか！

「いいぜ、デュエルだ」

「君はすでに敗北の運命に見定められている、僕の勝利はゆるぎない！」

「そんなもん俺がぶち破ってやるよ、いくぜ！」

「デュエル!!!!」

「僕の先行、ドロー！カモン！《D・HERO ダイヤモンドガイ》！エフェクト発動！

デッキの一番上は、《デステニー・ドロー》！次のメインフェイズに効果発動が確定した！

カードを1枚伏せてターンエンドだ」

でたでた、ダイヤモンドガイのチート発動。

斎王様並みの運命力じゃんよ。

「さあ、行きますか、俺のターン！《マンジュ・ゴッド》を召喚！効果でデッキから《高等儀式術》を手札に加える！

《高等儀式術》発動、デッキから《ガード・オブ・フレムベル》を墓地へ送り、

手札から《サクリファイス》を儀式召喚！！」

（やーっと呼んでくれたか、マイマスター！）

・・・・・・へ？

なんか前で一つ目のキモイのが喋った様な気がするけど、そんなわけないよな！

幻聴だよな！違うよな！！

（なーに言ってたんだよ、俺はカードの精霊さ、《サクリファイス》の精霊さ！いままできづいてもらえなくてさみしかったぜえー？）

い・・・いやだ、いやだいやだあー！！

なんでだよ！もっとかつこいいm「ピー！！！！」シリーズとか（ネタバレにより規制）あるだろお！？

（あ、そいつらもいるぜ？ただマスターがこのデッキを一番最初に

使ったから)

「おい！何をぶつぶつ言っている！君のターンだ！」

「あ、悪い悪い。ちょっと作戦タイムでな。」

よし、出ちまったものは仕方ねえ！力を貸せサクリファイス！」

(まーかせな！)

「俺は《サクリファイス》の効果発動！ダイヤモンドガイを吸収する！いくぜ、バトル！マンジュゴッドでダイレクトアタック！」

「ちいつ、だがもう一体は通さん！速攻魔法！《サイクロン  
に装備されているダイヤモンドガイを破壊！」

「く、俺はカードを2枚セットしエンド」

エンド LP 2600

よし、とりあえず先手は取った。ここから主人公補正。

「僕のターン！ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた《デステニー・ドロー》の効果発動！

カードを2枚ドローする。僕は《D・HERO デビルガイ》を召喚！

さらにフィールド魔法、《ダーク・シティ》！

この効果で僕の「D・HERO」と名のついたモンスターが攻撃する時、

攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！

行くぞ！バトル！デビルガイでサクリファイスに攻撃！」

「させつかよ！罨カード《亜空間物質転送装置》！サクリファイスをこのターンのエンドフェイズまで除外する！」

「ならば巻き戻しが成立し、《マンジュ・ゴッド》に攻撃！《ダーク・シティ》により攻撃力は1600！さらに手札から《D・HEROダガーガイ》を捨ててさらに攻撃力が800アップ！」

「ちっ……」

どうせサクリファイスの効果で吸収されるのわかってやがんな。

妖斗 LP 3000

「2枚セットしてターンエンド」

「エンドフェイズに除外されていたサクリファイスがフィールドに戻る」

「俺のターンだ、ドロー！サクリファイスの効果で、デビルガイを吸収！」

（こっちに来なあ！ていつ！はっ！ちえいつ！どすつと！ちゅっとな！ぐちゅっ！）

うわ……さつきはわからなかったけどグロっ……R15指定いるかな？

放送禁止~~~~~



「一気に攻める！俺は《魔道戦士ブレイカー》召喚！効果で魔力カウスターを乗せて取り除き、その伏せを破壊する！」

「っ、まずいな・・・」

一気に攻め込む！

「バトル！ブレイカーでプレイヤーにダイレクトアタック！」

エド LP 1000

何勘違いしてるんだ！まだ俺のっついていいてえ！！！

「さらにサクリファイスでダイレクトアタック！」

（見てろよ、ほいやっ！ムニユッ！ぐちよっ！）

「がああああああっ！うえっ・・・」

・・・ごめん、エド・・・

「エンドだ「エンドフェイズに《スケープ・ゴート》発動！」なに？なんでダイレクトアタックの時に使わなかったんだ？

・・・っ！まさか、あのカード・・・もう持っていたのか！？

エド LP 400

「僕のターン！来てくれたか・・・」

僕は羊トークン3体を生け贄に捧げ、カモン！最強の『D』、《D

- HERO B l o o - D 》！！！」

なっ！やっぱりもってやがった！エドの父親が作った『D』・・・

・

「《D・HERO B l o o - D》！エフェクト発動！僕はお前のブレイカーをもらっ！さらに攻撃力が半分の800ポイントアップして2700！」

「・・・それだけじゃないんだろ？」

「ほう、知っていたか。その通り！このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターは全て効果が無効化される！」

く、サクリファイスが丸裸に・・・

「バトル！《D・HERO B l o o - D》！サクリファイスに攻撃！」

「ぐああああああっ！！！！！」

妖斗 LP 300

「よし、ターンエンド」

まずいな、だが初戦なんかじゃ負けらんねえ！

「俺の・・・ターン！」

きた！逆転の1手が！

「一気に行くぞ！まずは《天よりの宝札》互いの手札が6枚になるまでドローする！墓地の《マンジュ・ゴッド》と《サクリファイス》を除外して《カオス・ソーサラー》を特殊召喚！リバースカードオープン！《D・D・R》！手札を1枚捨てて、《サクリファイス

《を特殊召喚！さあ、いこうか！》

（まゝかせんしゃい！俺のモンスター効果で「使えねえよ」ガビーン！）

「でもデュエルの勝利のためのカギはお前だ！《死者蘇生》！墓地の《ガード・オブ・フレムベル》を特殊召喚！レベル1、《サクリファイス》とレベル6、《カオス・ソーサラー》に

レベル1の《ガード・オブ・フレムベル》をチューニング！

王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！

「シンクロモンスターか。だがそれでは僕にとどめは刺せないぜ」

「ああ、このモンスターじゃ無理だ。だが、さらに上があると言ったら？墓地の《ゾンビキャリア》の効果！手札をデッキトップへ送って特殊召喚！最後の手札、チューナーモンスター《クレボンス》！いくぞおっ！レベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル2の《ゾンビキャリア》と《クレボンス》をダブルチューニング！

「ダブルチューニング！？チューナーが2体だと！？」

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ！天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚！いでよ、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》！

「攻撃力が・・・3500！？」

「楽しいデュエルだったぜ！《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》

「バーニング・ソウル」！！！！」

LP0

イイイイイイイイイイイイヤッホオオオオオオオオオオオオ

オ!!!

「強かったぜ！あと一歩だったんだ、またデュエルしようぜ！」

「おい！妖斗！！」

「デュエルしてたのか！この様子だと勝ったん……だ……な、なあ、妖斗？」

（ハローベイバー！そのとうり、サクリファイスだ！よろしくなあ

！)

「お・・・おう・・・よ、よろしくな！」

気持ち悪いよなあ、やっぱし。サクリフェイスつれてるやつなんて見た事ねえよ。

「よし気合入ってきた！妖斗！決勝で戦おうぜ！」

「のぞむところだ！負けんなよ、十代！」

そういつて走っていく十代を見送るのだった。

(ヘイマスター！これからもヨロシクな！)

「あ・・・ああ、よろしく・・・できればスキんシップはやめてくれ！」

ぬるぬるするから！！

なんだかんだで精霊が来た今日だった。

## 第二期2話 まさかの開催！マイデッキ5（後書き）

はいそうですジエネックス開幕！

さらにエドに勝利！

精霊はサクリファイス！

むちやくちや新設定出てきました。

デッキは【サクリファイス】。

あのように回れば我が魂とか結構です。

このデッキは2軍に当たる結構主人公にとっての本命デッキです。

**第二期3話    v s 謎の少年    連鎖する謎（前書き）**

いや別にタイトルほど重大ってこともないんですが。  
一応この回新キャラと新精霊が出ます。

第二期3話 vs 謎の少年 連鎖する謎

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いけ！サクリファイス！」

ぐちゃっ・・・

「《ホルスの黒炎竜》！うわあああああ！！」

Win！

「《ドラグニティ・アームズ レヴァテイン》！」

ズバツ！

「俺の《カタパルト・タートル》が！！ちくしょおっ！」

Win！

「サクリファイスのダイレクトアタック！」

グニョッ・・・

「ぐはっ・・・負けたぜ！いいデュエルだった！」

Win！

「サクリファイスの効果発動！吸収！」

ちゅどすっ！きゅiiiiiiiiいん・・・

「《ウォータードラゴン》！」



「ダイレクトアタック！」

「・・・ち、負「なかなかいいデュエルだったぜ！」・・・」

Win！

とりあえず初勝利からしばらく、【サクリファイス】と【ドラグニティ】でモブキャラたちに連勝している。・・・なんかメインっばい強さの奴もいたが、気のせいだよな！

（マスター調子いいねえ！俺らだけでいけるんじゃないの！？）  
ちーとつらいと思うがな。実際後3つはガチ目だしな。最後1個なんて好きなやついないだろぜってー。

（確かに最近のデッキじゃマスターのラストデッキに対抗しづらいだろうなあ）

だから最後の最後まで使いたくはないな。まあ・・・その前の2つも強いんだけどな。

ラストは相手に与える絶望感がダンチだ。

（まあぼちぼちやってこうぜ、そろそろ強いやつとも当たるんじゃないの？）

そうだな、まあお前らもがんばってくれよ！

とまあ雑談しながらそのへんを歩いていると、「おい、僕とデュエルしようよ!」

ん・・・モブ特有の単調な顔でもないが、原作にこんなやついなか  
ったよな・・・  
イレギュラーか?

「なんか気になる?」

「あ、ああ、悪い。ちよつとな。さ、デュエル始めようか」

「僕の正体がわからないんでしょ?」

「ああ?お前何者だ?」

「君が勝ったら名前や正体、その他諸々教えてあげるよ。さあ始めよう!」

「この世界じゃどうせこうなるのな。行くぞ!」

得体が知れん、サクリファイスにはすまんが『ラスト3』使っぞ!  
(了解だ!勝てよマスター!)

「ああ、デュエル!」

・・・あれ?向こうの掛け声は?

「ハッ!デュエルだあ!!!!!!」

・・・トリッパ。150%トリッパ。

「俺の先攻、ドロー！俺は《デルタフライ》 召喚！

さらにデルタフライを除外して《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》特殊召喚！

効果発動、手札から《ホルスの黒炎竜 LV6》を特殊召喚！  
カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「・・・【お触れホルス】はわかってたよ。デュエルする前に精霊見えてたから」

なにい？まさか・・・

（やっと出会えたな、我が主よ）

LV6、か。なかなか頼りになるじゃねーの！よろしくな！

（ああ、全力でやつらの相手をしようじゃないか）

クールな戦士つてとこだな。性格は。どこその一つ目とは正反対か？

「っーか君精霊見えるのか」

「うん、まあみてな、デュエル始まる前にトラップごっそり抜いていたから、そんな抑止はできないよ！」

「・・・・・・・・・・」

「僕のターン！ドロー！僕は《レッド・ガジェット》と《マシンナーズ・フォートレス》を捨てて、《マシンナーズ・フォートレス》を墓地から特殊召喚！

さらに永続魔法《機甲部隊の最前線》発動。バトル！《マシンナーズ・フォートレス》でホルスを攻撃！」

「リバーiscardオープン、《収縮》！」

「つつ、《機甲部隊の最前線》発動！さらに《マシンナーズ・フォートレス》の効果！「通さん！《天罰》！手札を1枚捨てて無効！」ちっ、僕は《マシンナーズ・ギアフレイム》を特殊召喚！

僕はメインフェイズ2に《壺の中の魔術書》発動！互いに3枚ドロ1。4枚セットしてターンエンド」

??? LP 2950

「ひとつ言っていていいか？」

「ん、なに？」

「『デッキでよく使われるキーカード』が見えたからって、『そのデッキ』とは限らないんだ」

「???どういう意味？意味分かんないよ？」

「まあみてな、このターンでおまえに勝つ！」

「ふーん、でも僕はこの伏せについて何にも説明しないよ、自己説明敗北フラグは立たないね」

「そのセリフが死亡フラグだという事にきづけ・・・」  
若干天然入ってるな。

「俺は《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の効果で手札から《マテリアルドラゴン》を特殊召喚！

《レベルアップ！》ホルスをLV8にレベルアップする」

ならチェーンして《非常食》、《機甲部隊の最前線》含む伏せカー

ド2枚を墓地に送り3000ポイント回復！

??? LP 5950

ふーん、やるね。

「バトルだ！マテリアルで《マシンナーズ・ギアフレーム》に攻撃  
！」

「くっ・・・」

??? LP 5350 「トラップ発動！《光の護封壁》！30  
00ライフを払って攻撃をさせない！」

??? LP 2350

「大方次のターン《マシンナーズ・ギアフレーム》つかってなんか  
するつもりなんだろ？言っただはすだ！このターンで決めると！使い  
どころを間違っただな！速攻魔法、《禁じられた聖杯》発動！」

「なっ！！？まさか・・・」

「対象は《ホルスの黒炎竜LV8》！攻撃力3400！」

「ロックを・・・突破した！？」

「いけ！ホルス！！『ブラック・ホルス・ギガファイア』！！」

「ぐああああああああっ！！！！！！！！」

??? LP 0

「・・・負けた、か」

「さあ、お前の名前を教えろ」  
「なっ！？ネタに走ったのはいいがなぜ声がかぶっているんだ？

「いや、言っと思ったんだ。それより、あのデッキ、ただの【お触れホルス】じゃないね？」

「ああ、あのデッキには《王宮のお触れ》は入ってない。その代わりに効果モンスター対策のカードを多量につんだ、魔法、効果モンスター対応型の【ホルス】だ。  
さあそろそろ名前を教えてもらおうか」

「僕の名前は・・・上刃　そう　爽」

「なにっ！？上刃！？」

「ま・・・まさか！？」

「お前、あの爽か？弘樹の弟の！？」

「僕の兄は上刃　弘樹さ。あっちの世界ではお世話になったね。な

んか声も顔も変わっちゃったんだけど・・・」

「ああ、どうりで気づかないわけだ。お前なんか今ガッ○ユのウォ○レイみたいな姿してるぞ・

髪は黒いが」

このガッ○ユ兄弟が。

「で、お前は何でここにいる？」

「わかんないよ。兄貴がこの前急にいなくなっただ、それでカードシヨップでも行っただのかなと思って、探しに行ってみたら、突然このカードがね、光ったんだ」

《マシンナース・フォートレス》か。さっきのも精霊だったのかな？

「んで、気づいたらアカデミアにいたんだ。なんか色々カオスだけど」

「おかしいだろ、いきなりジェネックスとか、いろいろ」

「あ、あのね、十代が来る前に僕が三幻魔やいろいろな倒しといたんだ。そしたらバランス崩れちゃったみたいだね」

「おい・・・なにしてん・・・っ!!」

そのとき、俺の心の中に得体のしれない怒りが・・・

「おまえ、まさか廃寮のイベント消化したんじゃないかなろうな？」

「うん、いったよ。聞いちゃった 生の若○ヴォイス!!」

「ホルスっ！焼きつくせえええええ！LV8になつて焼け！焼け  
焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け  
焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け  
焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け  
焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け焼け」

「わーっ！！まったまった！録音してるから！ちゃんと録つてある  
からあつ！」

生じやなきや意味がない・・・いけホルス・・・

（すまん、今の我が主に逆らうと我がとばっちり食いそうなのでな、  
怨むなら主を怨め！『ブラック・ホルス・ギガファイア』！）

「理不尽！？ああああああああああっつつつつつつ！！  
！！！！」

俺が正気を取り戻した時には、目の前に黒焦げの物体が転がって  
いましたさ。

（まったく何をしてるんだか。その若〇とやらはそんなに魅力的な  
声をしておるのか？）

（さあな？でもちよつと聞いてみたいなあゝあのマスター、毎回  
デュエルが終わるたびに対戦相手に「廃寮で何か起こったの知つて  
る？制裁タッグデュエルってやった？」って聞きまくってたから  
なあ）

（まあこの主人のもとでは退屈しない日々が遅れそうだな。もしか  
すると我をさらなる高みに上げてくれるかもしれん）



（ダンナ、あの姿にはなれたのかい？精霊界で何回もチャレンジしてるって聞いたぜ？）

（恥ずかしいが『アレ』になるためには何かが必要らしいのだ、  
今もそれが何かはわからんがな）

（なるほどね、確かにマスターには何かを感じる・・・俺もカッコよくならないかな！すらりと長い脚！あこがれるぜえ！！！！）

（貴公がそんな姿になったら……主は無事でいられるだろうか？おもに精神的な面で）

（失礼だぜ、ダンナ！まあ、これからよろしくな！あいつらもそろそろ使ってもらえるだろ）

（ああ、これからもサポートしようじゃないか、今少年にヘッドロックスをかけながら殴っている、あの少年を、な）

「おいサクリファイス！吸収だ！こいつを吸収しろ！」

(お呼びだ、  
いってこい)

（あいよいくぜ少年！覚悟しろ才才才才！）

[illegible]

アカデミアに、少年の悲鳴がこだました。

## 第二期3話　vs 謎の少年　連鎖する謎（後書き）

【ホルス】です。普段は《天罰》とか《わが身を盾に》とかで効果モンスターの対策に特化したデッキ。

大会とかではサイドにお触れ入れとくとすぐスイッチ出来ます。

この回ではおまけ程度のデュエルと、新キャラを出しました。

いろいろな伏線はつといたんで、今後につなげていこうと思います。とくにホルス強化フラグを。

サクリファイスは・・・さすがに長い脚は・・・

**第二期4話 いざ精霊界！そびえたつ『塔』（前書き）**

この回はタイトル通り精霊界への旅立ちです。

デュエルは今回はありません。

## 第二期4話 いざ精霊界！そびえたつ『塔』

「ねえ、妖斗兄？ひとつ頼みがあるんだけど」

「なんだ？」

「その【サクリファイス】、僕に『返して』くれないかな？」  
かえして？あ、そうだった。あんまり長く使ってたから忘れてたぜ。

もともとこの【サクリファイス】は爽のデッキだった。ただあまりに回りすぎたから相手がいなくなつて、封印の意味も込めて俺にわたしてくれたんだつたな。

俺が使つてもよく回るとは思うが、こいつが使つとマジでトラウマもんだ。

「・・・どうだ？サクリファイス？」

（俺の元々の持ち主は、そう、いや爽だったか！マスターも気に入ってるが、どうせなら一番強いやつのところでおもいきりまわしてほしいかもな！）

「掛けたつもりか？まあいい、俺も、そう、思う。強いやつのはうが、お前にとつてもためになるからな。

爽はまたなんで封印を解こうと思ったんだ？」

「爽ってなんで、そう、いっぱい掛かるのかな？」

「そう、いう名前をしてるお前が悪い」

「ああ、そう、ですか。【マシンナーズ】もいいんだけどね。さすがに十代とかに勝てないんだよね。この世界には僕が本気でブンまわしても目立たない人たちが大量にいるしね」

「全面的に同意。じゃあ、爽をサポートしてやってくれよ！」

（任せるマイマスター！ん今は元マスターか？でも渡してないからまだマスター？でももう同意も出たし元マスターなのか？いやかしいm「めんどくさいんだよ！ほれ爽。こいつの扱いは難しいぞ」じゃあな、元マスター！）

「「切り替えはやつ！！」」  
「たたくこいつは……」

（主よ）

ん？ホルスカ。いまはLV8の姿・・・ってか  
「自由にレベルアップダウンできるのか？」

（ああ。4になることはあまりないが、6だと動きやすくてな。基本は6でいようと思う）

「じゃあ今はなんで？」

（8の姿だと心が落ち着いてな。話したいことがよくまとまる）

「ん？なにかあるのか？」

（ダンナ？もしかして？）  
ん？何だサクリファイス？

（ああ、突然で悪いが精霊界に行ってはもらえないか？）

「精霊界？また急な話だが、どうした？」

（我ら『レベルモンスター』は、昔からLV8までが限界とされていた）

…8が限界？でも確か…

（ああ、つい最近、といっても結構前だが、ついに《アームド・ドラゴン》のやつらがLV10の姿になった。奴等はその圧倒的な力を振りかざし、我らの故郷、『レベルマウンテン』を独占していな）

「攻撃力と言ったらお前も変わらないんじゃないのか？」

つかむしろ《アルティメット・インセクト》とかだったら勝てるんじゃないのか？

（いや、精霊界は攻撃力だけでは決まらない。こっちで言う、効果や、やはり肩書きや名前も関係している）

ふーん。やっぱこっちの世界とは違うんだな。で…

「俺は何をすればいいんだ？」

（手伝ってほしい。といっても、奴等を倒すのは我らだ。主に手伝ってほしいのは我が…さらなる高みへ上るためのサポートだ）

「さらなる高み？」

（ああ、我も、奴等に対抗できる力を…LV10にならなくてはいいけない）

・・・オーイ、タグに「オリカあり」つけるのかー？

「はじめて聞け、そんな姿」

（我も何度が挑戦した。あそこには『レベル・タワー』という塔があつてな。その最上階に行けば古の力が手に入るらしい。実際、《アームド・ドラゴン》はその最上階に到達し、LV10の暴力的なまでの力を手に入れた）

「・・・お前はなんでいけなかつたんだ？」

実際、2800のセブンより3000で使い勝手がいいホルスの方が行きやすいはずだ。

（奴は、人間を連れていた。パートナーをな。その最上階に行くまでには3、4回デュエルをしなければならん。しかも1人1人が相当な強さだ。我は自分のデッキで行くのだがいつも最後で負けてな。その番人に言われるのだ。「貴様には何かが足りん。その答を見つけるまでは俺に勝つことはできないだろう」・・・とな）

「なるほどな。それで足りないものが俺、すなわちパートナーってわけか」

（ああ、その通りだ。一緒に来てくれるか？）

「おもしれえ！いきなり精霊界に行くとはな！爽はどうするよ？」

……つていねえ！！書置きが・・・「ぼく完全に空気なんで帰ります。精霊界には行きたくないです」

「アンニャロー！！今度会ったらもっかいヘッドロックだ！」

（まあ落ち着け。まだ続いているぞ）

「お、ほんとだ。何々？」「P、S　がんばっていこうよ元マスター！！」お？あいつは来るのか？「……」といっても俺はいかねえがな！ハハハハハ！」……………霸霸霸霸霸霸霸霸……………」

（主よ、何か色々危ない笑いが…………）

「すまんすまん、取り乱したようだ。で、どうやって行く？温泉か？」

（いや、我に任せろ。おそらく2時間もあれば扉が開くはずだ）

「ふーん。だったら一回寮に戻って準備してくるよ。またここに来ればいいんだな？」

（ああ、たのむ）

「うい。了解」



・・・しかし、思い返すと色々カオスだよな。初日からジェネックス始まるし、俺と同じ世界の奴がトリップしてるし。拳句の果てには精霊界だと。

デッキは4つも無くなるし。幸いホルス含む『ラスト3』と2軍の《サクリファイス》は無事だったけど。サクリファイスは譲ったけどな。

まあ、これからしばらくはホルス一本で戦うんだろうが。出来れば他も使わないでいけるといいけどな。

・・・などと考えていると2時間もあっという間だ。時間が来たから待ち合わせの場所に向かう。

「よお、ゲートは開いたか？」

（ああ、ここにある）

まあまた完璧にどこでも○アの再現だな。

「じゃあ、行こうか。俺も真のお前の力を見てみたい。期待してるぜ」

（言われるまでもない！我は必ず、マウンテンの人々を救う！）

そのホルスの決意の言葉と同時に、視界が白一色になった。

「っここは？」

見慣れない街、案外にぎわっているようだ。

だが、少し高級そうな店になると店主はいつも《アームド・ドラゴン》か・・・

確かに今はアームド中心の政治みたいだな。

結構平和じゃないか？そう思った瞬間、

「頭が高あい！！！！！」

耳をつんざくアームドLV5の怒声。

「10様がお通りになる！頭を下げる！！！」

なんだ、そういうことか。よく見る典型的な王様政治だな。

「馬鹿、アンタ頭下げろ！死ぬぞ！！！」

「うおっ！？」

そう言って俺の頭を押さえつけたのは《ホルスの黒炎竜LV6》。

「あれ、お前俺のパートナーのホルスか？」

パートナーなら「アンタ」とは呼ばないよな。

「そりゃ同名モンスターなんかいっぱいいるっつての。たぶんアンタのパートナーはレベル・タワーあたりにいるんじゃないかねえか？ここんどこもっぱらそこにいるぜ」

「そうか、サンキュな！」

そついつてレベル・タワーの場所を聞きながらそこに行くと・・・  
「また立派な塔です事」

高くそびえたつそれはきらびやかな宝石がちりばめられた、なんか  
《バベル・タワー》みたいな塔。  
語呂が似てるからか？

（おお、主か、待っていたぞ）

「いまはLV6なのか。同じ6でもやっぱ性格違うんだな」

（それはそうだろう。同じ精霊なんぞいない。それより、だ。デッキは私のデッキを使ってくれ）

「当たり前だつつの！それじゃなきゃパワーアップにならないだろ」

（フツ、言うまでもなかったか。ならば頼むぞ、我が主よ！この先に待ち受けているのは『過去の自分』だ！）

「過去の自分だと！？ってことは俺の無くなったデッキを使ってくるのか！？」

（おそらくそうだろう。相当な難敵だぞ）

「そついう事は先に言ってくれよな！【BF】なんか倒すの一苦労だぜ」

（大丈夫だ。主ならば不思議と負ける気がしない。負けるつもりはないのだろう？）

言ってくれるね、こいつは。

「たりめーだ、負けるつもりでデュエルなんかしたことねーぜ！．．．  
．まあ、負けたことはあるけどな」

（その時の悔しさ、未熟さ含めて『過去の自分』だ。そいつらを、打ち破れ！）

「やってやるよ、そしてお前の新たな力、見せてもらうぜ！行くぞ  
！！」

そう言っただけで俺とホルスはレベルタワーの中に入って行った。  
その時はまだ、この後に起こる事なんて何も気にしていなかったんだ．．．．

第二期4話 いざ精霊界！そびえたつ『塔』（後書き）

少し気になったことが・・・

今回、地の文を少しだけ増やしてみました。

やっぱり地の文は多い方がいいんでしょうか？

それとも会話文を多くしてテンポをよくした方がいいのかな？

どんなことでもいいので、気づいた方は感想に書き込んでくれると  
すごくありがたいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024/>

---

遊戯王 ～世界又にかける転生者～

2010年12月12日14時32分発行